

コロナへの対応―日本とシンガポール

大津 隆文

三月下旬にシンガポール在住の娘一家三人が来日した。二年半振りのことである。入出国にはコロナのため新しい手続きが必要とされていて、その実体験が興味深かった。

まず日本政府の入国規制は依然として厳しく、日本人帰国者はいいが外国人は原則禁止である。娘の夫は英国籍なので個別にビザを取得しなければならない。来日の目的に老親の病気見舞いをあげ、昨年秋の私の入院・手術証明書を送ったりした。

入国者は出発三日前以内に現地でコロナの陰性証明書を取得し、さらに到着後羽田で検査を受け陰性が確認される必要がある。

日本政府の定める陰性証明書の記載事項は、姓名、生年月日、性別等。これについて米国在住者等から、海外の医療機関では性別は記載しない(本人確認上必須ではない)、とのクレームが寄せられ、結局性別はオプショナルとされたとのこと。ジェンダー問題について彼我の意識のズレに気付かされる。

また羽田に到着後陰性証明書の確認を何回も求められ、なぜ一回で済まないのかと不満と疲労感が募ったという。行政の情報共有体制、デジタル化に問題ありか。

帰国に際しては、シンガポール政府から出発二日以内の陰性証明書の取得が求められる。驚いたのはそれがオンラインで可能なこと。シンガポールの医療機関と画面を共有し、その監視下指定の検査キットで検査、結果画面を先方がチェックしすぐ証明書が送付される。三人がスマホと部屋に籠もって約二十分、費用は一人約二千元で、指定の医療機関に行くのに比べ手間はもとより費用は十分の一以下らしい。

昨年日本でオキシメーターや簡易検査キットが入手困難な時期に、こちらでは薬局で簡単に手に入るよ、と送ってくれた。シンガポールは素晴らしいと思った。

二週間の滞在中、娘が何度も日本は素晴らしいと感嘆の声を上げたのは、どこへ行くとも皆がマスクをしていること、どこでも皆が手の消毒をしていることだった。

私はもうすぐ七歳になる孫娘に会えて、本当に幸せな二週間だった。